

# The Training for Children's Librarian in the United States : A Case Study of the Carnegie Library of Pittsburgh

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 愛理 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6860">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6860</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# アメリカにおける児童図書館員の養成

—— ピッツバーグ・カーネギー図書館を例として ——

中山 愛理

【キーワード】 アメリカ公立図書館, 児童サービス, 児童図書館員, ピッツバーグ

## 1. はじめに

アメリカの公立図書館では、初期の段階から制度的要件である「すべての人びと (to all)」に対するサービス提供を目指して、図書館設置や拡張サービス、特定の属性を意識したサービスへの取り組みが展開されてきた。しかし、児童サービスが開始される以前のアメリカの公立図書館では、12歳や14歳といった年齢制限を設けたところもみられ、理念としての「すべての人びと (to all)」に向けたサービスという建前とは裏腹に、子どもに対する図書館サービスに取り組んでいないところも多くみられた。

19世紀後半以降、アメリカにおいて都市を中心に公立図書館が整備され、分館の設置、障害者サービスの実施が進められ、児童サービスにも意識が向けられ始める中で、利用者の属性に合わせたサービスへの対応のひとつとして、児童サービスが始まっていった。初期の児童サービスでは、図書館サービス全般に責任をもつ図書館長によって担われることが一般的であった。この当時、児童サービスに関して館長を補佐する「助手 (assistant)」や「係員 (attendant)」と呼ばれる者がおかれた。次第に「助手」や「係員」だけではなく、児童図書館員と呼ばれる職位が設けられるようになっていくと、児童サービスに対する一定の知識とスキルを持ち合わせた人物が求められていくようになった。

### 1.1 アメリカにおける児童図書館員養成

アメリカにおける児童図書館員養成は、児童サービスの普及が始まった時期から少し遅れて開始される。その中でよく知られているのは、ニューヨークのプラットインスティテュート図書館学校 (Pratt Institute Library School) の取り組みである。プラットインスティテュート図書館学校が、同インスティテュートの幼稚園教諭養成部門と連携しながら実施した児童サービスのための特別な講座 (Special Course) は、1898年及び1900年に開講された<sup>(1)</sup>ものの、ピッツバーグ・カーネギー図書館で児童図書館員養成学校が開設されることに伴って、以後廃止となった。それでも、一般の図書館員養成カリキュラムの中に、子どもに対する図書館サービスに関わる内容を組み込むことで、児童サービスの知識とスキルを身に付けられるようにした<sup>(2)</sup>。

ピッツバーグ・カーネギー図書館の児童図書館員養成は、1900年に開始された。その後も、1907年プラットインスティテュート図書館学校とニューヨーク公共図書館が連携した児童図書館員養成

講座，1909年クリーブランド公共図書館では児童図書館員養成のための2年制の特別講座が開設された例もあった。

なお、この当時のドレクセルインスティテュート図書館学校やイリノイ大学の図書館学校のような、一般的な図書館学校では、児童サービスについて詳しく教えられることはなかった。

## 1.2 先行研究

20世紀初頭に始まったアメリカにおける児童図書館員養成に関連する主要な文献は以下のよう  
にいくつか存在している。

ロングは、アメリカ全体の子どもに対する図書館サービスを概観したなかで、プラットインスティテュートやピッツバーグ・カーネギー図書館における初期の児童図書館員養成の一端に言及している<sup>(3)</sup>。しかしながら、端的な事実は示されているものの、どのような者にどのような教育を実施したのかといったような具体的な教育内容への言及はみられなかった。

堀川は、アメリカの公共図書館における児童サービスが、学校と強い関連をもちながら発生、発達してきた経緯を踏まえ、教育との関連からその発達過程を捉え、児童図書館員がそのサービスの意義を教育のどの側面に見出してきたのかを明らかにしている<sup>(4)</sup>。その中で、プラットインスティテュート、ピッツバーグ・カーネギー図書館、クリーブランド公立図書館において児童図書館員養成が行われた事実に言及がされている一方で、具体的な教育内容への言及はされていない。

塚原は、アメリカの児童図書館員教育の現状について文章<sup>(5)</sup>をまとめている。この文章は、1980年代の状況について、ワシントン大学大学院図書館学科を例にまとめたもので、科目の位置づけとその内容紹介にとどまるものであった。

汐崎は、現在の米国において児童図書館員に求められている知識と技術、および職の機会を検証し、その専門性と地位を明らかにすることを研究目的とし、専門教育機関における児童図書館員養成の体制及び児童図書館員のキャリアパスについて取り上げた研究<sup>(6)</sup>を発表している。汐崎の研究は、アメリカ図書館協会認定校のカリキュラムをWebサイトで調査するとともに、アメリカの児童図書館員関係者に聞き取り調査を行い、分析及び考察をしている。児童図書館員養成関連科目の設置状況を踏まえた科目内容の分析では、資料中心の科目が多いこと、ストーリーテリングの重視、乳幼児からヤングアダルトまでを対象とする特徴が示された。キャリアパスの分析では、児童図書館員の求人は多いが、雇用の基準が高いこと、児童図書館員のキャリアアップは困難であることを示す内容のものであった。

高橋は「北米の現状に見る児童図書館員養成の現状」を説明することを目的に文章をまとめている<sup>(7)</sup>。いくつかの具体例に基づき、児童図書館員の求人条件にみる求められる要件や資質、アメリカ・カナダの図書館情報学教育システムを踏まえたうえで、シモンズカレッジの児童図書館員教育の状況、高橋自身のイリノイ大学・マクギル大学での留学経験の紹介から内容が構成されている。

藤野は、アメリカの児童図書館・学校図書館発達経緯をまとめた中で、プラットインスティテュートにおける児童図書館員養成の事実に言及し、「児童図書館員の仕事とはどういうものかを実際に見学できる『場』が創出され、児童室担当者に必要な知識や技術を教える場所もつくられた」<sup>(8)</sup>と指摘するが、具体的にどのような知識や技術を教えたかまでは記述されていない。

アメリカの文献では、トーマスの博士論文「アメリカ公立図書館における児童サービスの起源：1875-1906」<sup>(9)</sup>がある。この文献には、児童サービスを担った先駆者との関連で児童図書館員養成への言及があるものの、養成に関する考察があまりみられない。

このほかにも、アメリカの図書館情報学教育の歴史と現状を簡潔にまとめた研究<sup>(10)</sup>が存在して

いるが、児童図書館員養成についての言及は見られなかった。

以上のように、現在の児童図書館員に求められる知識やスキルを確認できるような文献が複数存在する一方で、アメリカにおける初期の児童図書館員養成については、養成が始まったことに言及する文献が複数存在するものの、その養成内容への具体的な言及は見られなかった。

### 1.3 本稿の目的

先行研究を踏まえつつ、本稿では初期の児童図書館員養成を行った機関の中から、ピッツバーグ・カーネギー図書館の児童図書館員養成に絞って検討することにした。ピッツバーグ・カーネギー図書館に絞った理由は、2点ある。1つは、ピッツバーグ・カーネギー図書館は、児童サービスとしての児童図書の本誌編纂に関する取り組みがイギリス図書館協会（Library Association）の機関誌（*Library Records*）で紹介されるなど国外からも広く評価され<sup>(11)</sup>、図書館が学校の運営をしていた点である。2つめは、大都市の図書館の中で児童図書館員の「養成学校」を初めて実施したことで評価されている<sup>(12)</sup>点である。当時のアメリカにおいて児童図書館員養成に特化した図書館学校はほかに存在していなかったのである。

本研究では、ピッツバーグ・カーネギー図書館に焦点を当てたうえで、なぜ、一般的な図書館員養成ではなく、児童図書館員養成に特化する必要があったのか、どのような知識やスキルをもった児童図書館員養成を行おうとしていたのかを明らかにすることを目的とした。この目的のために、ピッツバーグ・カーネギー図書館における児童図書館員養成の開始状況や児童図書館員養成の状況やその教育内容の分析を行った。分析を通して児童図書館員という人材養成が求められた背景や児童図書館員養成を行った効果を確認することにより、図書館の人材養成を検討する材料を提供することができる。

## 2. ピッツバーグ・カーネギー図書館の設立と児童

ピッツバーグ・カーネギー図書館は、その名の通り、設立にアンドリュー・カーネギー（Andrew Carnegie）と深くかかわっていた。ピッツバーグは、スコットランドから移民してきたカーネギーが勤労少年として働いた地であり、後にカーネギー鉄鋼会社（Carnegie Steel Company）の本部が入るビルが建設されたように、カーネギーとかわりの深い都市であった。そのカーネギーは、鉄鋼業で成した富の一部を公立図書館建設に寄付したことで知られている人物である。

1881年にカーネギーは、ピッツバーグ市長に公立図書館建設のための250,000ドルの寄付を申し出る書簡を送っている。しかしながら、カーネギーの寄付の申し出は、カーネギーの個人的な名誉のためではないかと受け取りに反対する意見もみられたため、すぐに受け入れに向けた動きにつながらなかった。ようやく1887年になって、図書館設置権限を有する州の議会において、ピッツバーグ市が図書館設置することが承認された。州議会において承認されても、まだ寄付の受け入れに対する反対意見が存在し、図書館建設に向けた動きは遅々とし進まなかった。1893年になって、ピッツバーグ・カーネギー図書館は、博物館、美術館、音楽ホールを併設した建物の一部として建設が開始され、1895年に完成した。完成した図書館には、目録室や書庫、出納カウンター、新聞室、雑誌室、講義室などが配置されていたが、子どものための部屋は設けられていなかった。この点について、1928年より1964年までピッツバーグ・カーネギー図書館の館長であったムンが「1895年以前図書館利用者としての子どもはほとんど認識されておらず、彼らのための規則もなかった」<sup>(13)</sup>と指摘するように、子どもの利用は当時想定されていなかったのである。

開館したピッツバーグ・カーネギー図書館には子どもが多数来館したことで、「図書館理事者はそうした部門の必要性にすぐに気づき、1896年2月1日雑誌室として以前使われていた部屋のひとつを児童室へと転用した」<sup>(14)</sup>のである。しかし、児童室を設けたとしても「午後や夕方に忙しくなるこの部屋はしばしば混雑しており、数十人の子どもが床や隣接する出納室のベンチに座る必要性が出てきた」<sup>(15)</sup>と報告されたように収容人数を超える来館があった。この状況は、1898年になっても変わらず、「放課後、この部屋は人であふれかえっている。最近の日曜日に、図書館が4時間のみの開館時に児童室に250人を超える子どもがやって来た。子どもの閲覧席は32席なので、子どもの多くは部屋を出るか、雑誌室へ行った。日曜日の午後に子どもたちは児童室や出納台の部屋の床にしばしば座っていた」<sup>(16)</sup>という。さらに子どもに対応する人も十分とは言えず「中央図書館を訪れる子どもに対する読書案内の試みは、ほとんど行われていない。現状では不可能なことである」<sup>(17)</sup>とされた。この時期の公立図書館の児童室における読書案内は、ピッツバーグ・カーネギー図書館長報告において「正しい指導の下でそれらを手にすることができるような場となり、家庭用に提供されたものも同様に手にすることができる」<sup>(18)</sup>との記述にみられたように、子どもに対する良書選択や低俗とされる図書への検閲という意図がある<sup>(19)</sup>と思われる。

1898年、ピッツバーグ・カーネギー図書館では、既存の児童室の状況と児童室を備えた新たな分館開館を踏まえて、子どもに対する図書館サービスを担う組織整備として、児童部門(children's department)が設置された<sup>(20)</sup>。その責任者として、ブルックリン公立図書館の図書館員であったフランセス・オルコット(Frances J. Olcott)<sup>(21)</sup>を迎えた。オルコットの下で、館内での子どもの対応・お話し会、図書館と学校との連携(図書の団体貸出など)、図書を詰めた図書箱を子どもたち自身で管理するホームライブラリーの提供、夏季に公園などで図書を提供するプレイグラウンドに取り組んでいった<sup>(22)</sup>。サービスの拡充とともに、拠点の拡充も図られた。1899年には、児童室を備えた2つの分館が新たに開館した。

その結果、既存の中央図書館児童室と3つの分館の児童室には、さらに多くの子どもが来館し、「子どもに対応する特別な訓練をしたアシスタント職員の必要性が明白となった」<sup>(23)</sup>と述べている。ピッツバーグ・カーネギー図書館では、実際に子どもに向けた図書館サービスを運営する中で、その業務を専ら担当する人が必要であると導きだしたのである。そうなるに児童室の運営に関わる人をどのように確保するかが問題となっていった。ピッツバーグ・カーネギー図書館では、ホームライブラリーやプレイグラウンドの運営で協力を得ていた幼稚園教諭が児童室に最も適しているのではないかという認識のもと、ピッツバーグ幼稚園教諭養成学校やアレゲニー幼稚園教諭養成学校で学んだ者を職員として試行的に採用した<sup>(24)</sup>。幼稚園教諭養成学校を卒業したばかりの者は、快活な若い女性で、子どもに対する接し方も熟知しており、最適の者と思われた。しかし、彼女らは図書館の一般的な業務や児童文学に関する知識が明らかに不足していた<sup>(25)</sup>。そのため、子どもに対する読書案内などを行うことが難しかったのである。このようにピッツバーグ・カーネギー図書館では、幼稚園教諭養成学校を卒業した者による子どもに対する図書館サービス運営から、そのサービスを担う者として知識不足であることが次第に課題となっていたのである。

### 3. ピッツバーグ・カーネギー図書館における児童図書館員養成

図書館実務を通して、幼稚園教諭としての知識をもつだけでは、不十分であることを経験的に理解したピッツバーグ・カーネギー図書館は、独自にその業務に即した知識と経験を有する人材の確保をする計画を考えるに至った。それが、自前の児童図書館員養成方法であった。

### 3.1 ピッツバーグ・カーネギー図書館児童図書館員養成講座：1900-1901

ピッツバーグ・カーネギー図書館が自前の児童図書館員養成を着手するにあたっては、幼稚園教諭養成学校と連携をしながら開講の準備を進めていった。1900年10月1日に児童図書館員養成講座が15名の応募者の中から、5名の参加者を得て開講された<sup>(26)</sup>。

この講座は、当初2年間でストーリーテリング、児童文学、図書館学などの講義と図書館現場での実習が予定されており、特に図書館員指導の下での現場実習に重きがおかれていた。受講料は50ドルが徴収されたが、下宿費用が週あたり6～10ドルの時代を考慮すれば、破格の設定であったといえる。その格安の受講料を支えたのが、ピッツバーグ・カーネギー図書館の図書館員たちであった。ピッツバーグ・カーネギー図書館主催の講座に同館の図書館員が講師を兼務することで、新たな講師料を支払う必要が生じなかったのである。

中央図書館の児童部門長オルコットをはじめとして、分館の図書館員は、各部署の業務に関連する科目の講義を担当することで、実務上必要な基礎知識を教授した。また、分館の図書館員の指導のもとで、図書館現場での実習に取り組むことで、子どもたちへの対応を体得していくことができるようになっていた。

1900年10月に開始された養成講座（training course）は、好評を得て、1901年より養成学校（training school）へと名称変更して発展していくことになる<sup>(27)</sup>。

### 3.2 ピッツバーグ・カーネギー図書館児童図書館員養成学校

1901年、養成講座から、児童図書館員養成学校（Training school for children's librarians）へと、体制整備が図られた。

#### 3.2.1 ピッツバーグ・カーネギー図書館児童図書館員養成学校の組織と運営

この“学校”で図書館実務及び子どもへの対応に関する知識の教授を担当したのは、ピッツバーグ・カーネギー図書館の職員であった。養成開始初年度の講師陣は、1890年代にニューヨーク州立図書館学校（New York State Library School）で学んだ者がオルコット含めて6名、ブラットインスティテュート図書館学校で学んだ者4名、アーマー図書館学校（Armour Institute Library School [後のイリノイ大学図書館学校]）で学んだ者1名、幼稚園教諭養成学校で学んだ者4名から構成されていた<sup>(28)</sup>。それに加えて、特別講義を実施するために、他の都市の図書館員や子どもに関わる専門家を招聘することもあった。

それらの費用は、学費で賄われることになったが、講座から“学校”となっても、初年度75ドル、2年目50ドルと授業料は大きく変わらなかった。授業料を大幅に引き上げることなく、運営できた背景にピッツバーグ・カーネギー図書館は、授業の一環としての図書館現場実習を「児童部門の発展に不可欠な要素である」と位置付けており、同館の児童サービスを担う労働力として学生をみなしていたことがある。

また、後述するように、アンドリュース・カーネギーからの寄付を得たことが学校の発展に欠かせなかった。カーネギーは、児童図書館員養成学校に対して、関心を抱き、1903年より3年間にわたって年間5,000ドルの寄付を行った。この寄付は、3.2.2節で後述する講師の招聘による特別講義の拡充に使われた<sup>(29)</sup>。

児童図書館員養成学校の入学者をどのように決めていたのかについては、9月に実施された文学、歴史、一般教養の試験で選抜していたとされる<sup>(30)</sup>。この試験は、一般的な教養が備わっているの

かを確認するためのものであり、大学を優秀な成績で卒業した者は、試験免除となっていた。しかしながら、入学試験で、子どもに対応するための資質を見抜く選抜は難しく、その対策として仮入学制度を設けていた。これは、最初の秋学期終了時に、子どもに対応する児童サービスのための資質に見込みがないと判断された学生は退学するといった制度であった<sup>(31)</sup>。3.2.2 及び、3.2.4 において後述したように、実際に秋学期末で資質欠如を理由に退学者が出ている。

一般的な入学とは別に、各図書館長から推薦された者は、無試験で1年間の特別課程を履修することができるリカレント教育としての仕組みも整っていた<sup>(32)</sup>。しかし、一からの児童図書館員とリカレント教育を同じ講義・実習の中で並行することは難しく、指定された別の図書館学校で、1年学んだ者から学校長の推薦を受けた者が特別課程を履修することができることと制度変更がなされた。

### 3.2.2 ピッツバーグ・カーネギー図書館児童図書館員養成学校のカリキュラム

ピッツバーグ・カーネギー図書館児童図書館員養成学校は、当初2年間に分類作業や目録作業のようなテクニカルサービス科目や、児童室の運営、ストーリーテリング、児童文学、心理学、市民教育などの科目(表1)を配置するカリキュラムを想定していた。しかし、児童図書館員に対する人材ニーズの高まりもあって、早く人材を得たいという図書館現場を意識し、1902年には1年間の課程を提供するに至った<sup>(33)</sup>。学生は、初年度を終えた段階で修了証書が授与され、さらに2年目を終了するとディプロマの証書が授与されることになっていた<sup>(34)</sup>。2年目に進むことができたのは、優秀と認められた学生であった。カリキュラムは適宜見直しが行われ、1905年頃より2学年で一般的な図書館運営や図書館史、選書について、クリーブランドのウェスタンリザーブ大学図書館学校で講義を受け、クリーブランド公立図書館での実習を受ける6週間の国内留学を実施した<sup>(35)</sup>。

表1 1901年の児童図書館員養成学校カリキュラム<sup>(36)</sup>

1 学年 (21 時間・40 週の年 840 時間)	2 学年 (21 時間・31 週の年 651 時間)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・発注及び受け入れ</li> <li>・目録作業</li> <li>・分類作業</li> <li>・貸出業務(利用登録含む)</li> <li>・児童室の計画と整備</li> <li>・児童室の運営</li> <li>・絵画の選択</li> <li>・ストーリーテリング、読み聞かせ</li> <li>・図書館と学校との連携</li> <li>・ホームライブラリー</li> <li>・心理学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目録作業、索引作成</li> <li>・分類作業</li> <li>・児童部門の運営</li> <li>・児童文学</li> <li>・ストーリーテリング、読み聞かせ</li> <li>・図書館と学校との連携</li> <li>・市民教育(勤労少年少女に対するサービス [現在の YA サービスに相当])</li> <li>・心理学</li> </ul>
図書館現場実習	

1年を10月から12月を秋学期、1月から4月を冬学期、1月から6月を春学期、6月から8月を夏学期に分けて、カリキュラムが運営されていた<sup>(37)</sup>。

講義は、中央図書館の講義室で行われた<sup>(38)</sup>が、図書館現場実習は中央図書館のみならず、分館も活用された。図書館現場実習は、講師である図書館員指導の下で、養成学校の学生はピッツバーグ・カーネギー図書館の中央図書館及び分館合わせて6つあった児童室でお話し会での朗読<sup>(39)</sup>と

## アメリカにおける児童図書館員の養成

いった実習を行った。実習先は、様々な社会階層の子どもと関わる機会を確保することを目的として、学期毎に他の図書館の児童室へと移動することになっていた<sup>(40)</sup>。

それとともに、ホームライブラリーやプレイグラウンド、図書館と学校との連携業務にも参加した。図書館の現場実習が重視されたのは「子どもに対して、個別的な対応したり、集団で対応したりする能力は、理論的に教えられるものではない。養成中の児童図書館員は、すべての社会階層と接触をもつ必要がある。(中略)彼女らの養成期間中に、学生の能力は、試験の結果だけではなく、実際の図書館業務や子どもに対応するための個人的な資質からも判断されることになる」<sup>(41)</sup>という実務の中で児童図書館員としてふさわしいかどうかを判断すべきであるとの理由が挙げられていた。実際に、1904年入学者のうち3名が最初の学期を終える段階で、児童図書館員の資質を欠くと判断され退学に至っている<sup>(42)</sup>。

### 3.2.3 外部講師による特別講義

前述の児童図書館員養成学校のカリキュラムには、表1に挙げられた科目以外に、1904年表2、1905年表3、1906年表4までカーネギーの寄付を活用した以下の特別講義が実施された。

表2 1904年の特別講義<sup>(43)</sup>

講演者	講義テーマ
アーサー・E. ポストウィック (ニューヨーク公共図書館貸出部門主任)	「ニューヨーク公共図書館における児童サービス」
エリザベス・カルプ (ピッツバーグ・アレゲニー幼稚園大学)	「連携」
ジョン・コットン・ダナ (ニューアーク公立図書館館長)	「公立図書館はニューアークの子どもたちへ何をしているのか」 「図書館の内装」
エレクトラ・C. ドーレン (ウェスタンリザーブ大学図書館学校主任講師)	「悪書：それらの影響と矯正」 「公立学校と公立図書館の連携 — 図書館の視点から」
ミリアム・S. ドレイパー (ブルックリン子ども博物館図書室室長)	「子ども博物館の業務」
ギルバート・D. エマーソン (フィラデルフィアの製本業者)	「公立図書館における図書の補修」
S. C. フェアチャイルド (ニューヨーク州立図書館学校副学校長)	「アメリカ図書館協会会長」 「選書の基本」
W. I. フィッシャー (アマスト大学図書館)	「アメリカ図書館協会出版委員会の業務」
アリス・G. ゴダッド (ルーベン・マクミラン公立図書館児童サービス補佐)	「児童室の原理」
キャロライン・M. ヘインズ (ハートフォード公立図書館館長)	「子どものための作家」
クララ・W. ハント (ブルックリン公立図書館児童部門責任者)	「児童室の設計と設備」 「児童図書館員の計画と技能」
ベウラ・ケナード (ピッツバーグプレイグラウンド委員会委員長)	「夏季プレイグラウンド」
アン・キャロル・ムーア (ブラッドインスティテュートフリー図書館児童図書館員)	「子どものための歴史・旅行図書」 「子どものための伝記」
ハッコン・ニフス (ノルウェーの図書館員)	「ノルウェーにおける図書館業務」

メアリー・W. プラマー (ブラットインスティテュート図書館学校長)	「子どものための詩集」 「子どものための詩」 「子どものための詩の朗読」
キャサリン・L. シャープ (イリノイ大学州図書館学校長)	「図書の発達」
マリー・L. シェッドロック (イギリス・ロンドン)	「ストーリーテリングの技法」 「9歳から12歳の子どもの詩」 「アンデルセン生誕プログラム」 「小さな子供のお話」
ルーティ・E. スターズ (ウィスコンシンフリー図書館委員会)	「理想的な図書館生活」 「図書館は美しい」 「少女の問題」 「図書館業務におけるいくつかの西部の局面」
J. P. ステファン (ピッツバーグハイランド高校校長)	「公立図書館と学校との連携——学校の視点から」
ルース・E. タップン (ピッツバーグ・アレゲニー幼稚園大学講師)	「教育の基本原則」

表3 1905年の特別講義<sup>(44)</sup>

講演者	講義テーマ
ジョージア・ハリソン (ピッツバーグ幼稚園指導主事)	「ゲーム」
H. ロズウェル・ベイツ (ニューヨークスプリング通近隣ハウス長)	「墮落した貧困者を支援するために理解すべき3つの事柄： モラル、子供らしさ、可能性」
キャロライン・バーニティ (クリーブランド公立図書館児童サービス管理者)	「子どものための文学の発展」
エレクトラ・C. ドーレン (ウェスタンリザーブ大学図書館学校主任講師)	「悪書：影響と改善」 「公立学校と公立図書館の連携：図書館の視点から」
リンダ・A. イーストマン (クリーブランド公立図書館副館長)	「クリーブランド公立図書館における選書」 「クリーブランド公立図書館における拡張サービス」
ギルバート・D. エマーソン (ピッツバーグ・カーネギー図書館製本者)	「製本」 「製本の材料」
フランク・P. ヒル (ブルックリン公立図書館館長)	「大図書館システムの組織」 「図書館建築」
クララ・W. ハント (ブルックリン公立図書館児童部門主任)	「児童室の計画と設備」 「児童室のための100冊」 「成功している児童図書館員」 「児童室のための選書」
ベラウ・ケナード (ピッツバーグ女性クラブ共同委員会委員長)	「プレイグラウンド業務」
アリス・B. クロガー (ドレクセル大学図書館学校校長)	「逐次刊行物」 「レファレンス部門及びレファレンスライブラリアン」
ヘンリー・E. レグラ (ウィスコンシンフリー図書館委員会委員長)	「ウィスコンシンフリー図書館委員会の業務」
エリザベス・N. マックファーランド (ピッツバーグ・アレゲニー幼稚園教諭大学)	「子どものゲーム」
A. L. ベック (グラバースビル公立図書館長)	「ニューヨーク州グラバースビルの図書館」

アメリカにおける児童図書館員の養成

メアリー・W. プラマー (ブラットインスティテュート図書館学校)	「子どもへの詩の朗読」 「公立図書館の発展」
マリー・L. シェドロック (ロンドン)	「ストーリーテリング」
ルーティ・E. スターズ (ウィスコンシンフリー図書館委員会)	「図書館精神」 「図書館は美しい」 「少女の問題」 「一般市民の観点から見た公立図書館」
ルース・E. タッパン (ピッツバーグ・アレゲニー幼稚園教諭大学講師)	「教育の基礎的事項」

表4 1906年の特別講義<sup>(45)</sup>

講演者	講義テーマ
メアリー・E. アーハーン (『Public Libraries』誌編集者)	「経營業務」 「図書館業務における個人的要素」
ロバート・P. ブリス (ペンシルヴァニアフリー図書館委員会事務局長)	「ペンシルヴァニアフリー図書館委員会の業務」
アーサー・E. ポストウィック (ニューヨーク公共図書館における子どもへのサービス) 「図書館建設計画の基礎」	
エラ・R. ボイス (ピッツバーグ・アレゲニー幼稚園教諭大学講師)	「ホームライブラリーグループのための定型的業務」
キャロライン・バーニティ (クリーブランド公立図書館児童サービス管理者)	「クリーブランド公立図書館の児童サービス」 「小さな子どもの図書」
エリザベス・カルブ (ピッツバーグ・アレゲニー幼稚園教諭大学学長)	「連携」
ジョン・コットン・ダナ (ニューアーク公立図書館長)	「公立図書館はニューアークの子どもに何をすべきか」 「図書館の内装」 「図書館の印刷物」
ギルバート・D. エマーソン (ピッツバーグ・カーネギー図書館製本者)	「製本」 「製本の材料」 「修復」
ヘレン・E. ハーネス (ライブラリージャーナル編集者)	「図書館協会の発達」 「図書館文献」
クララ・W. ハント (ブルックリン公立図書館児童部門主任)	「児童室の計画と設備」 「成功している児童図書館員」 「運営上のいくつかの課題」 「子どもと職員との個人的関係」 「児童室のための選書」 「児童室のための100冊」
エリザベス・N. マックファーランド (ピッツバーグ・アレゲニー幼稚園教諭大学)	「子どものゲーム」
ルーティ・E. スターズ (ウィスコンシンフリー図書館委員会)	「図書館精神」 「図書館は美しい」 「少女の問題」 「少年の問題」 「図書館業務のいくつかの西部的側面」
メアリー・L. ティッコム (ワシントンカウンティフリー図書館長)	「ワシントンカウンティフリー図書館の業務」

この特別講義で招聘された人物を見ると当時のアメリカ図書館界において活躍していた人物が多数含まれていることが分かる。1904年と1906年の特別講義を担当したアーサー・E. ポストウィックやジョン・コットン・ダナ<sup>(46)</sup>はアメリカ図書館協会会長を務めるような人物であった。その他にも、ブルックリン公立図書館児童部門主任のクララ・W. ハントは、ブルックリンで30以上の分館に児童室を設置する指揮を執った人物であり、ウィスコンシン州フリー図書館委員会のルーティ・E. スターズは、ウィスコンシン州で巡回文庫の発展を支えた人物として知られ、ワシントンカウンティフリー図書館長のメアリー・L. ティッコム<sup>(47)</sup>は、アメリカ初の移動図書館を考案・導入した人物として知られ、児童サービスに力を注いだ人物であった。こうした一流の図書館員による図書館実務に関わる話を聞くことは、学生が児童に関する知識を身につける際に役立つ機会となった。

カーネギーの3年間にわたる寄付が終わった1907年にも、特別講義がおこなわれたものの、メアリー・E. アハーン(『*Public Libraries*』誌編集者)「図書館業務における個人的要素」、ウィリアム・H. ブレッド(クリーブランド公立図書館長)「クリーブランド公立図書館の組織」、キャロライン・バーニティ(クリーブランド公立図書館児童サービス管理者)「小さな子どもの図書」、ジャネット・M. ドレイク(ジャクソンビル公立図書館長)「ジャクソンビル公立図書館の業務」、ギルバート・D. エマーソン(フィラデルフィアの製本業者)「製本」のわずか5講座に激減してしまった。また、近隣の図書館への講演案内が送付されたように、純粋な児童図書館員養成学校の特別講義としての位置づけにとどまらず、現役図書館員の研修の機会としても位置づけも併せもっていたのである。

カリキュラムの見直しが行われた1908年には、児童図書の書誌編纂に関する特別講座が新たに追加された<sup>(48)</sup>。この講座は、児童書誌編纂に関わる課題や実践的な目録作成が内容に盛り込まれることになった。

### 3.2.4 ピッツバーグ・カーネギー図書館児童図書館員養成学校の学生

ピッツバーグ・カーネギー図書館児童図書館員養成学校の入学者は中学校や高校を卒業したばかりの女性がほとんどであった。その背景には図書館員という仕事や子どもに関わる仕事が女性の仕事と考えられていた時代背景が反映されている。

実際の入学者数(表5)は、講座として始まった1900年に5名、“学校”へと名称変更した翌1901年に13名となっており、1906年までは10名台の入学者であった。

入学者の出身地は、年によって異なるものの、当時のアメリカ、さらには世界的に見ても、児童図書館員養成に特化した図書館学校が他になかったことを反映し、地元ピッツバーグ出身者だけにとどまらなかった。勤務する図書館から派遣された特別履修学生は、ニューヨークのブルックリン、オハイオ州クリーブランド、ニュージャージー州ルーザーフォード、ペンシルベニア州ウィクスバリ、デラウェア州ウィルミントンの図書館の職員などがいた<sup>(49)</sup>。中学校や高校を卒業した者の出身地は、コネティカット州、ワシントンDC、インディアナ州、ミシガン州、ニューヨーク州、オハイオ州、ロードアイランド州、ウィスコンシン州、アラスカ出身者<sup>(50)</sup>とともに、アメリカ外のイギリス・ロンドン、ノルウェー、デンマーク<sup>(51)</sup>やベルギー出身の学生もいた。この1901年から1906年までの入学者112名のうち21名が途中退学し、残りの91名が卒業し主にアメリカ国内の公立図書館で児童図書館員として働いていると記録が残されている<sup>(52)</sup>。図書館現場での実習を通して、児童図書館員としての資質の有無を判断され、認められない場合には、次の学期に進むことができない仕組みとなっていたことが、退学率18.7%、卒業率81.2%という数字にも表れている。

表5 児童図書館員養成学校の入学者数

年	入学者数	備考
1900年	5	
1901年	13	
1902年	18	
1903年	14	*別に25人が特別履修
1904年	15	*最初の学期末で12人に減る *別に9人が特別履修
1905年	14	*別に2人が特別履修
1906年	19	*別に3人特別履修
1907年	25	
1908年	30	*最初の学期末で25人に減る
1909年	30	

1907年以降、入学者が25名から30名となった理由は、ピッツバーグ・カーネギー図書館が増改築されることに伴って、図書館のサウスウィングに専用の講義・実習室を設け、そこに30人分の学生机が配置された<sup>(53)</sup>ことで、30名まで受け入れ可能となったことを反映したものと見える。

#### 4. 考 察

本研究では、ピッツバーグ・カーネギー図書館に焦点を当てたうえで、なぜ、一般的な図書館員養成ではなく、児童図書館員養成に特化する必要があったのか、どのような知識やスキルをもった児童図書館員養成を行おうとしていたのかを明らかにすることを目的とした。ピッツバーグ・カーネギー図書館における児童図書館員養成の開始は、児童サービスを開始するにあたって担当に、適当と思われた幼稚園教諭の資質をもつ人物がサービスに十分対応できていなかったという適正な人材の不足から出発していることが確認された。また、ピッツバーグ・カーネギー図書館の児童図書館員養成において、図書館員としての基礎的な知識である資料の発注及び受け入れ、目録・分類作業、利用登録、貸出業務が教授されるとともに、同時期の他の一般的な図書館学校の標準カリキュラムでは教えていない、掲示板に張る絵画の選択、ストーリーテリング、読み聞かせ、図書館と学校との連携、ホームライブラリー、市民教育などの児童サービスに関わる内容が教授されていた。この児童サービスに関わる教授内容は、ピッツバーグ・カーネギー図書館で実施されていた児童サービスの内容をそのまま反映したものであった。ピッツバーグにおける児童図書館員養成の特徴は、図書館運営の中から、児童図書館員に必要な知識やスキルを見出して養成教育を行っていたのである。つまり、図書館現場での必要性に迫られた養成であったことから、即戦力となる知識やスキルを有する人材養成に直結していたといえる。

#### 5. おわりに：ピッツバーグ・カーネギー図書館における児童図書館員養成学校の意義と限界

おわりにかえて、ここではピッツバーグ・カーネギー図書館における児童図書館員養成の意義と限界を指摘しておきたい。

ピッツバーグ・カーネギー図書館は、考察でも述べたように、現場の運営の中から生じた必要性に即して、登場した学校であった。ピッツバーグ・カーネギー図書館の人材育成は、現場の即戦力となるために、図書館現場での実習が重視されていたことも特徴であった。図書館現場実習の重視は、当時の児童図書館サービスの実情に合わせた知識やスキルをもった人材養成を行うことにつながっていったという意義がある。しかし、別の見方をすれば、図書館現場実習という名目で、不足するピッツバーグ・カーネギー図書館の児童サービスを担うマンパワーを補うためのものではなかったのかとみられかねない。

これとは別の意義もあった。ピッツバーグ・カーネギー図書館以外の図書館へ児童図書館員の人材供給に寄与したことである。ピッツバーグ・カーネギー図書館児童図書館員養成学校は、ピッツバーグ・カーネギー図書館の職員として採用することを確約するような卒業後の地位を保証していなかったものの、全国的な児童図書館員に対する人材不足からくるニーズもあって、卒業生の多くを児童図書館員として送り出すことになったのである。

さらに、各図書館長から推薦された者を特別履修生として受け入れたことは、図書館員に対するリカレント教育の先駆的な試みのひとつとして意義あることであった。しかし、正規カリキュラムの運営に支障を及ぼし頓挫してしまったように、前提となる知識や経験の違いを踏まえた教育をするにはまだ模索段階であったのである。

#### 《注》

- (1) “Course for training of children’s librarians,” Pratt Institute School of Library Training 1900–1901, Brooklyn, [1901], p. 5.
- (2) “Report of the committee on library training,” Bulletin of American Library Association, vol. 2, no. 5, September, 1908, pp. 199–216.
- (3) ハリエット G. ロング『アメリカを生きた子どもたち：図書館の果たした役割』古賀節子監訳，日本図書館協会，1983，p. 117.
- (4) 堀川照代「米国における公共図書館児童サービスの発達」『図書館学会年報』vol. 32, no. 2, June, 1986, p. 49.
- (5) 塚原博「アメリカの児童図書館員教育」『現代の図書館』vol. 26, no. 2, 1988. 6, pp. 99–103.
- (6) 汐崎順子. 米国における児童図書館員の養成とキャリアパス. 三田図書館・情報学会 2007 年度研究大会. 2007. 11.
- (7) 高橋樹一郎「北米の事例にみる児童図書館員養成の現状」『セミナー「児童図書館員養成を考える」：さまざまな立場から：利用者，公共図書館，大学，海外：報告書』日本図書館協会，2015，pp. 28–35.
- (8) 伊香佐和子監修，藤野寛之編著『アメリカの児童図書館・学校図書館：サービス活動の先駆者たち』日外アソシエーツ，2015，p. 7.
- (9) Thomas, Fannette H., “The genesis of children’s services in the American public library: 1875–1906,” Ph.D. Thesis, University of Wisconsin Madison, 1982, 357 p.
- (10) 倉橋英逸「アメリカ合衆国における図書館情報学教育」『21 世紀の情報専門職をめざして：カナダとアメリカ合衆国における図書館情報学教育と情報環境』関西大学出版部，1998，pp. 75–90.
- (11) Oriol Prizeman, *Philanthropy and light: Carnegie libraries and the advent of transatlantic standards for public space*, London, Routledge, 2017, p. 187.
- (12) Fannette H. Thomas, *Palace of culture: Andrew Carnegie’s museums and library in Pittsburgh*, Pittsburgh, University of Pittsburgh Press, 2011, p. 116.
- (13) Ralph Munn, *Carnegie Library of Pittsburgh: history, 1895–1969*, Pittsburgh, [Carnegie Library of Pittsburgh], 1970, pp. 4–5.
- (14) “Librarian’s Annual Report,” First Annual Report to the board of trustees of the Carnegie

- Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1897, 1897, pp. 13-14.
- (15) *ibid.*, pp. 13-14.
- (16) "Report of the Librarian," Third Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1899, 1899, pp. 19-21.
- (17) *ibid.*, pp. 19-21.
- (18) "Librarian's Annual Report," First Annual Report to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1897, *op.cit.*, pp. 13-14.
- (19) 川崎良孝『図書館の歴史 アメリカ編 増訂第二版』日本図書館協会, 1995, p. 159.
- (20) "Report of the Librarian," Third Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1899, *op.cit.*, pp. 19-21.
- (21) オルコットについては以下を参照。  
Phyllis Dain, "Olcott, Frances Jenkins (1872-1963)," Dictionary of American library biography, Colo, Libraries Unlimited, 1978, pp. 387-388.
- (22) "Report of the Librarian," Third Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1899, *op.cit.*, p. 19.
- (23) "Report of the Librarian," Fourth Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1900, 1900, p. 17.
- (24) *ibid.*, p. 17.
- (25) "Report of the Librarian," Fifth Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1901, 1901, p. 25.
- (26) *ibid.*, p. 29.
- (27) Ralph Munn, Carnegie Library of Pittsburgh: history, 1895-1969, *op. cit.*, p. 16.
- (28) Carnegie Library of Pittsburgh. Training school for children's librarians, 1901-1902, Pittsburgh, [1901], p. 4.
- (29) "Report of the Librarian," Eighth Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1904, 1904, pp. 24-27.
- (30) Carnegie Library of Pittsburgh. Circular of Information Concerning the Training School for Children's Librarians: 1904-1905, Pittsburgh, 1904, p. 9.
- (31) "Report of the Committee on library training," Bulletin of American Library Association vol. 2, no. 5, *op.cit.*, pp. 213-214.
- (32) Carnegie Library of Pittsburgh. Circular of Information Concerning the Training School for Children's Librarians: 1904-1905, *op.cit.*, p. 10.
- (33) Carnegie Library of Pittsburgh. Training school for children's librarians, 1902-1903, Pittsburgh, [1902], p. 5.
- (34) *ibid.*, pp. 8-9.
- (35) Carnegie Library of Pittsburgh. Circular of Information Concerning the Training School for Children's Librarians: 1905-1906, Pittsburgh, 1905, p. 8.
- (36) Training school for children's librarians, 1901-1902, *op.cit.*, p. 4.
- (37) Carnegie Library of Pittsburgh. Circular of Information Concerning the Training School for Children's Librarians: 1904-1905, *op.cit.*, p. 3.
- (38) Some information about the Carnegie Library of Pittsburgh, Pittsburgh, Carnegie Library of Pittsburgh, 1902, p. 19.
- (39) "Report of the Librarian," Sixth Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1902, 1902, p. 22.
- (40) "Report of the Committee on library training," Bulletin of American Library Association vol. 2, no. 5, *op.cit.*, pp. 215-216.
- (41) Carnegie Library of Pittsburgh. Training school for children's librarians, 1902-1903, *op.cit.*, p. 6.
- (42) "Report of the Librarian," Ninth Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie

- Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1905, 1905, p. 35.
- (43) *ibid.*, p. 37.
  - (44) “Report of the Librarian,” Tenth Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1906, 1906, p. 36.
  - (45) “Report of the Librarian,” Eleventh Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1907, 1907, p. 39.
  - (46) 山本順一 “ジョン・コットン・デイナの生涯と図書館哲学”. 図書館人物伝: 図書館を育てた 20 人の功績と生涯. 日外アソシエーツ, 2007, pp. 299-322.
  - (47) 中山愛理 “アメリカ公共図書館における自動車図書館の先覚者: メアリー・レミスト・ティッコム”. 図書館人物伝: 図書館を育てた 20 人の功績と生涯. 日外アソシエーツ, 2007, pp. 323-346.
  - (48) “Report of the Librarian,” Thirteenth Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1909, 1909, p. 32.
  - (49) “Report of the Librarian,” Seventh Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1903, 1903, p. 24.
  - (50) “Report of the Librarian,” Fourteenth Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1910, 1910, p. 31.
  - (51) “Report of the Librarian,” Twelfth Annual Reports to the board of trustees of the Carnegie Library of Pittsburgh for the Year Ending January 31, 1908, 1908, pp. 35-36.
  - (52) *ibid.*, pp. 35-36.
  - (53) *ibid.*, p. 40.